

1. 取組の背景

和歌山県のイチジク栽培は全国3位の栽培面積を誇り、那賀管内の栽培面積は約83haで、県全体の約80を占める。

近年は、生産者の高齢化に伴う労力不足により、別品目への転換や栽培面積を縮小する傾向にある。

また、連作障害（いや地、株枯れ）による生産性の低下も産地の縮小に拍車をかけている。

そこで振興局では、出荷調整の省力化や、生産性の維持に向けた強勢台木の普及に向けた取組を行った。

2. 活動内容（詳細）

（1）イチジク栽培講習会の開催

・JA紀の里イチジク部会及び営農部、振興局職員で新規就農者に向けた講習会を開催。

（2）樹勢維持を目的とした強勢台木の導入と栽培技術検討

強勢台木（zidi 台）の導入状況と、台木について検討会を行うとともに、安定生産に向けた栽培技術の開発について検討を行った。

（3）イチジク加工品の試作

イチジクの果実、葉を用いた加工品を試作した。

3. 具体的な成果（詳細）

（1）イチジク栽培講習会の開催

アグリビギナー事業を活用し、新規就農者向けイチジクの栽培研修会を開催した。

JA紀の里イチジク部会の協力で現地見学も行ったところ、新規に岩出市の農家が2名栽培をはじめた事となった。



写真1 新規就農者向け研修会

（2）樹勢維持を目的とした強勢台木の導入と栽培技術検討

いや地抵抗性台木（zidi 台）の供給によりイチジクの安定生産に向けて令和2年度は550本の供給で55a分（新規圃場換算）となった（イチジク全体で1,722本：JA紀の里購入分）。

昨年に引き続き、株枯れ病が確認された圃場でのネグローネ台木の栽培は順調な生育を続けており、来年度は収穫を迎える事から継続して経過観察を行う。

（3）イチジク加工品の試作

那賀地域の女性グループ2団体の協力のもと、果実や葉を加工した商品の試作に取り組んだ。いくつかの加工品が作られたが、中でも葉を加



写真2 茶の加工指導

工したお茶について、地域のイチジク農家も関心を示し、次年度以降商品化の可能性がないか模索することとなった。



写真3 試作のイチジク茶（左）乾燥のみ（右）蒸し＋乾燥

4. 農家等からの評価・コメント

（岩出市 M氏）

イチジクの栽培農家が年々減少しているが、軽量で高齢となっても安定して生産活動を続けられるイチジクは良い品目だと思う。新しい就農者の世代でも増えてくれたらと思う。

（JA紀の里 営農指導員 S氏）

イチジクの強勢台木の現地導入も安定して本数が入ってきている。現状はいや地に zidi 台木、株枯れにネグローネ台木を推進しているが、広島県では新たな株枯れ抵抗性台木で成果を出している品種もあると聞く。「品種は技術」という言葉もあるように新品種の検討・導入については、関係機関と協力してどんどんやっていきたい。

（紀の川市 J氏）

イチジク栽培の収益性を向上させるための取組として、加工品の開発は今後必要になってくると考えている。お茶だけでなく他の商品開発も可能性を模索してみたいと思う

5. 普及指導員のコメント(那賀振興局農業水産振興課・主査・北原伸浩)

新規イチジク農家の育成は産地において急務である。今回の研修では既にイチジク栽培に取り組んでいる新規就農者も参加した。新規の就農者だけでなく、他のイチジク農家にも相互の圃場を確認し、栽培のポイントなどの情報交換を行う事で、産地の技術向上につながるのではないかと考えられた。

強勢台木の導入は営農指導員や産地の生産者の間でしっかりと認識してもらえるようになったと思う。今後は次の優良台木の探索を行う事が目標となると思われる。

現在農研機構開発の株枯れ抵抗性台木「励広台（れいこうだい）」が管内の種苗業者にはいつてきている。現在、増殖段階にあり、供給は令和4年度から可能との事である。

いや地についても同様に有望な台木の探索を継続し、産地の維持・発展に繋げたい。

加工品は産地全体で取り組める方向に進めていきたい。イチジク部会などの大きな団体でやれる事が望ましいと考える。

6. 現状・今後の展開等

- (1) イチジク栽培の普及、技術向上
- (2) 新規就農者の獲得（担い手確保）
- (3) 加工品の継続支援（現状はお茶が有力）